



Title	三山歌の註釈史を辿る
Author(s)	吉永, 登
Citation	語文. 1952, 7, p. 25-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

三山歌の註釈史を辿る

吉 永 登

中大兄近江宮御宇天皇三山歌一首

高山は、雲根火雄男志と 耳梨と 相諍ひき 神代より

かくなるらし 古昔も しかなれこそ 虚蟬も 燐を あら
そふらしき(巻一、一三)

反歌

高山と耳梨山と相し時立ちて見に来し印南国原(同、一四)

右の長歌には今一首反歌がついてゐる。しかしそれは左注にも云つてゐるやうに反歌としては問題があり、且つ本稿の所論には關係がないので省略することにした。ところでこの長歌、特に前半の「香具山は歌傍雄男志と耳梨と相諍ひき」については古来色々の解釈が行はれてきたことは周知の事実であらう。しかも問題は主として傍点を施した「は」「雄男志」の解釈と三山の性別にあつたと云へるので、ここではそれらの点に注意しつつ、過去におけるこの歌の注釈の歴史を辿り、あわせて私見を述べることにしたいと考える。

二、

この歌についての最初の注釈は、鎌倉中期の仙覚によって試みられてゐる。彼は古点「タカヤマハクモネヒヲ、シト」を否定して、「カクヤマハウネビヲ、シト」と試み改めた上

……カク山は女山也。敵火山ト耳梨山トハ男山也。シカルニ耳梨山ハジメニ高山ヲケシヤウスルニ、ナニトナクウヒケクシケキナリケリ。ソノ後ニ敵火山又高山ヲケシヤスルニ、敵火山ハ姿モヲ、シク、ヨカリケレハ、コレニ心ウツリニケリ。ヲ、シクトイフハ、ケタカクヨキ也(仙覚全集、二四頁)と解してゐる。

ところでこの解を虚心に眺める時、たとへば後述するやうに後になって別個の立場から取り上げられることにならうとも、何となく安定を缺いてゐるやうに思はれる。これは万葉集の原歌は修飾的要素を除くと、「香具山は耳梨山と争ひき」更には、「香具山は争ひき」となるやうに、極めて平面的な叙述になつてゐるにかかわらず、仙覚説では、「はじめは……何となくうけひけしきなり」「その後……心うつりにけり」などかなり複雑な叙述になつてゐて、云はば物語、時間的要素が加はつてゐること

による相違から来るものと考へてよい。

それでは何故仙寛がかうした迂遠な解釈をしたのであろうか。一面、反歌の「あひし時」を逢し時と解したことになる影響も見逃せないであらうが、仙寛の解釈力を考へる時、何か他に理由があるやうに思はれてならない。

成心を捨ててこの歌を語法的にたどる時、「雄男志」を仙寛の云ふやうに雄男しいと解する限り、香具山といふ女性の山は畝傍山を男らしい山だと考へて耳成山といふ同じく女性の山と争つたといふ解が得られるであらう。恐らく仙寛にしても最初この解が頭に浮んだに相違ない。しかも彼をしてこの解に従はしめなかつたものは、思ふに外ならぬ妻争ひ伝説の一般的な形式にあつたものではなからうか。歴史的事実であつたか否かの詮索は別にして、古事記、日本書紀に見られる妻争ひ説話、例へば古事記に見える大國主命が兄達と八上媛を争つた話、秋山下水男と青山靈男の兄弟が伊豆志処女を争つた話、さては記紀共に見られる仁徳天皇が庶弟の隼別皇子と女鳥女王を争はれた話など、どれ一つとして二人もしくは二人以上の男性が一人の女性と争つた話でないものはない。これを純文学作品に見えるものについて考へても、万葉集における二人の男によって争はれた桜児の伝説、三人の男にしたはれて去就に迷ひ、耳成の池に身を投げた寔児の伝説、赤人蟲麻呂の歌に伝へられてゐる勝鹿の真間の手児名の伝説、さてはかの有名な陳努男と菟原男とによって争はれた菟原処女の伝説など、これ又何れも二人もしくは三人の男によって一人の女が争はれてゐるのである。

後述する沢瀉久孝博士の論文にも引用せられてゐるやうに、齋

藤茂吉氏は、その童馬漫語の中で、「鳥獸合精のありさまを觀、その能働と所働の因縁に思ひ入ると、……変態のありさまにならなければ、さう容易に能働と所働の因縁の引くりかへるやうなことはない」と云つて居られるが、正しくその通りで、能動的な男性が女性を争ふといふことこそ自然であり、従つてこの一般的な妻争ひの形式が、仙寛の解釈に大きな影響を与へてゐることは否めない。後に「雄男志」の意味が動いてゐること、この妻争ひの自然的な形式とを考へる時、云はば仙寛は二つの制約を受けて居つたことになるのであつて、このやうな制約のもとにあつては、彼の解釈が上述のやうにゆがむことも又止むを得ないと云ふべきであらう。

三、

仙寛の説はその後、鎌倉、室町期を通じて踏襲せられて來たらしく、江戸初期の北村季吟の万葉拾穂抄も仙寛説から出てゐない。しかるに契沖に至つてはじめて異つた解釈が試みられるのであるが、彼は代匠記の初稿本において、

第一の句(香具山は)かく山をばと心得べし。……うねびのを、しき山と、耳成山とが、をの、(香具山をば)われえむとあらそふなり。(全集本卷一、二六二頁、圈点・傍点筆

者)

といつてゐる。即ち彼に従へば、三山の性別は仙寛と変らないのであるが、仙寛説における主語とも云ふべき香具山は、その地位を畝傍山に譲つてゐるのであつて、契沖説では「男、しい畝傍山は香具山をば得んものと耳成山と争つた。」となるのである。と

ころで精撰本では傍点を施した「うねびのをしき山と、耳成山とが、をのゝわれえむとあらそふなり」といふ部分は見られないのであるが、反歌の解釈で

此歌に「(香具山が)耳梨山に逢て敵火山の負けたるやうなれど、あひし時はあはむとせし時なるべし。争の止めむやうはしらねど、推量するに耳梨山にあはむとする時、敵火山の殊に恨みて争ひけるなるべし。(同、二六五頁)

といつてゐることからも同じ考へを依然として持つてゐたことはうなづけよう。

さて、問題は「敵傍男、しと」が何故「男々しき敵傍山」もしくは意を取つても「敵傍山が男々しく」となるかといふことである。契仲ほどの国語学者がどうしてこんな無理な解釈をしたのであらうか。「男々しと」を敵傍山を修飾する形容詞「男々しき」と解することはもとより、たとへ「堂々」となどのやうに「と」を伴つた副詞があるとはいへ、「男々しと」を「男々しく」と副詞に解することなど許されよう筈がない。思ふにこの説のよつて来る所以は、仙覚説のもつ前述のやうな物語的、時間的要素を除き去し「敵傍山が争つた」といふ平面的な叙述にしたいと考へたためではなからうか。仙覚説のもつ物語的な不自然さと、彼自身の説のもつ語法上の不合理とを較べても、なほすぐれた国語学者であつた契沖が敢へて後者に目を閉ぢなければならなかつたことは注意すべきであらう。

この契沖説は万葉集略解が採用している以外、今日何人も顧みる人はないのであるが仙覚と同じく、「男々し」と二男一女といふ制約を受けての苦悶と考へれば、又それなりに必然性を持った

解釈と考へてよい。

四、

前述のやうに、仙覚説、契沖説何れも夫々の缺陷があつて、従ふことが出来ないとするならば、説の展開は当然「男々し」と二男一女との制約の両方もしくは何れか一方を解く以外には望むべくもないのである。果せるかか、江戸も末期近くなつてこの第一の「制約雄男志」が解かれる時が来た。

それは土佐の国の谷真潮と、大阪にも居たことのある京都の松下幸文との力によるもので、真潮の説は鹿持雅澄の万葉集古義の中で紹介せられ、幸文の説は彼自ら亮々草紙に載せられてゐる。真潮の説が幸文の説より二十年ばかり早いところから、在来色々億測が加へられてゐるのであるが、恐らく偶然的暗合と考へてよいのではなからうか。といふのは前述のやうに仙覚説から契沖説へとの展開のあとを辿つて行くなれば、必ずかうした説の生まれることは時期の問題にすぎないからである。

彼等の説は幸文の亮々草紙の言葉を借りていへば、「高山波とあるを、かく山をばと云ふ意に見ん事(契沖説)は強いたる事」であつて、「雄々し義にあらで、雲根火を愛の意」といふところにあるのである。「雄」の字が助詞として用ゐられた例は一番の「家乎毛名雄毛」にも見られ、「男志」を愛しと解すること必ずしも無理ではない。かくて香具山といふ男山は、敵傍山といふ女山を可愛いと思つて、同じ男山の耳成山と争つたと解せられ、仙覚説、契沖説とは、香具山、敵傍山の性が男女逆になつてゐるのであるが、「二男一女」の一般形式とも矛盾せず、仙覚説の如

き物語性もなく、又契沖説に見られるやうな語法上の無理もないといふ極めて自然な解釈が得られたのである。

しかしてこの真潮説を紹介した古義では、「男志」を愛しと解することについては、一応

男志を愛しの意といへるは、なほ俗意なり。故れ按ふに、男は曳の字を写誤れるにぞある。さらばウネビヲエシトと訓むべし。(普及版卷一、三三二頁)

と訂正を加へてゐる。勿論誤字説云々にはかに従ふことは出来ないにしても、根本においては矛盾するものでなく、且つ畝傍山を女山と解することに關しては

古事記安寧天皇の条に、畝傍山之美富登とあるのは御女陰にて、これ女山なるが故なり。さるはずべて古事記、書紀を考へわたすに、富登といへるは大抵女陰ならぬはなきを思ふべし。……(同、三三二頁)

と補つてゐる。万葉集註釈書としての古義の占める位置については今更論するまでもないことであるが、この古義の普及とともに真潮・幸文の説が漸次支配的な勢力を得るやうになつたことは亦云ふまでもない。明治以来の数多い注釈書が、極めて特異な一二を除いて悉くこの説を採用してゐるのも故なしとしないのであつて、まづ定説と認められて居つたと見るべきであらう。

五、

真潮、幸文の説が定説と認められて以来、ほとんど異説を唱へる学者はなかつたのであるが、さきにも少しく触れたやうに全然なかつたわけでもない。例へば折口信夫博士、豊田八十代氏、久

松藩一博士がそれで、仙覚説のところて述べたやうな二女一男説をとつて居られる。何れも詳しくは論じて居られないのであるが、折口博士の口訳万葉集は

昔女山なる香具山が、同じ女山なる耳梨山と、畝傍山を男らしい山だと、奪ひ合ひをしたといふが……(同書卷上、六頁)

と云つてゐる。しかしこの説に必要なのは前述したやうに二男一女の制約をはづす論拠なのであつて、これなくしては仙覚によつて否定せられたと考へられる素朴説と何等撰ぶところが無い。勿論折口博士は最近の万葉集講義「畝傍飛鳥篇」の中で、「女がつま争ひをすることは沢山例がある」とは云つて居られるのであるが、実はその例を示していただかないかぎり、軽々しく従ふことは出来ないことであらう。或は筆者の目の届かないところで明らかにして居られるのもあらうか。ただわづかに前述万葉集講義「畝傍飛鳥篇」の中で

又一番生きた伝説として残つてゐるものは、謡曲の「三山」で、此は一人の男を二人の女が争ふことになつてゐる。どういふ道筋で謡曲の中に採り入れられたかはわからぬが、三山に遠くない地方で育つた猿樂に居る人々の作物だから、この作意などは一番信用することが出来る(同書、四頁)といつて居られるが、この所論には大きな過誤があることに注意すべきであらう。

謡曲の「三山」は周知のやうに、万葉集中のこの三山歌と卷十六の藤原と椋児との伝説とにより、これに室町時代の世相であつた後妻打ちの習俗を加味して作られた創作で決して特異な伝説を素材とするものでない。現に謡曲では「げにげに万葉集にはく

大和の国に三山あり」とあって、明らかに万葉から出てゐることを示して居り、万葉の三山歌に対するある時代のある人物に恐らく作者世阿弥の解釈は知られても、決して万葉以外のものではない筈である。もしかうした作者の解釈を万葉以外の材料によつたものと考へるならば、謡曲の如き伊勢・大和・源氏等の物語によつて作られたものが多く、しかもそれらの中の大部分は謡曲作者によつて作り変へられてゐるのであるから、何れも又別種の伝説なり説語によつたと解釈しなければならぬ。それでは謡曲作者の創作といふことが全然認められなくなるのであって、たとへば世阿弥の故郷が偶然結崎といふ博士の云はれるやうに三山に近い土地であつたにせよ、少し飛躍がすぎるのではなからうか。

六、

折口博士とは異つた立場から真潮・幸文説反対せられたのは沢瀉久孝博士で、博士の説は雑誌国語、国文に発表せられ、後に万葉古径二に訂正を加へて収載せられてゐる。

博士はまづ三山の姿と感じとが

倭傍山	耳梨山	香具山
姿	男	女
感じ	男	女

と考へられることから、倭傍山を女性とする真潮、幸文説を疑はれ、更に「雄男志」を真潮等のやうに「を、愛し」と解することは、たとへ「雄」に借訓として助詞「を」に用ゐられた例があるにせよ、正訓に用ゐられてゐる場合の方が遙に多いことや、「雄」「男」と重ねられてゐるところに意識的なものが感ぜられ、やは

り雄々しいと解することが穩かであらうとせられてゐる。かくて結論として仙覚説の昔にかへるべきこと主張せられるのである。

ところで博士のこの説は三山歌に関する限り、たしかに伝統に眠る学会に清新な息吹きを与へたものであるが、しかもなほ一抹の不安が感ぜられないわけでもない。といふのは、なるほど三山の近くを郷里とする筆者にも、博士の所謂三山の姿と感じ——わけても倭傍山のそれについては同感出来るものがあり、且つ「雄男志」を雄々しいと解すること、これ又博士の卓見であると堅く信じてゐるにかかはらず、なほ全体の解釈には仙覚説のところ述べた不合理が一向解決せられてゐないからである。

博士の説に接して以上のやうな相反する気持に苦しんでゐた頃、筆者の周囲には香具山の現状は昔のそれとなく、麓にあつた埴安池を埋めるために山を崩したのであると教へてくれた知人もあり、又明治初年まで香具山が倭傍山のやうに聳えた山であつたことは富岡鉄斎の三山の図を見てもわかると聞かせてくれた友人もあつた。前者にどれだけの根拠があるかは疑しいにしても、後者にはやや具体性があるやうにも思はれる。しかし何れも何処かに真潮、幸文説を擁護しようとする臭があつて、どの程度信じてよいかは明らかでない。

七、

二つの制約の一つである「雄男志」の解釈にあれこれと心を苦しめる、これが在来の説に見られた特色ではなかつたか。それ故の行きつまりと考へれば、この際思ひ切つて今一つの制約である「二男一女」の枠をはづすことが唯一の残された道のやうにも思

はれよう。かうしたことを考へてゐた時、偶然とも云ふべきであらうか、折柄出版せられた異友田中卓氏の苦心になる住吉神代紀の研究を読んだところ、中に極めて興味のある説話のあることに氣附いたのである。勿論神代紀そのものは既に複製もあり、この説話にしてもその後佐佐木信綱博士の上代日本文学史に紹介せられてゐることを知つたのであるが、天平三年云々を含む奥書に疑義のある故か、あまり学界では問題にせられてゐなかつたようである。しかしその信すべきは田中氏の研究によつても明らかで、たとへ一部の学者の云ふ平安初期に下つても、少くとも説話そのものは遙か古いものであることは疑ひがない。

筋はすこぶる簡單で、昔猪名川の女神と武庫川の女神とが共に住吉大神に恋慕して、お互に争つた際、猪名川の女神は自らの川の大きな石を捨てては武庫川の女神に投げつけ、その川の芹を引抜いたといふのである。だから猪名川には大きい石がなく武庫川には芹が生えぬと結んでゐるその真意は何処にあらうとも、何よりも有り難いのは二人の女性が一人の男性を争つたといふ形式にあるといへよう。これこそ正しく「二女一男の夫争ひ説話」であつて、水と土、河海と山岳といふ相違はあつても、あの先学を苦しめた「二男一女」の枠をはづすことの出来る唯一の説話を考へてよい。

かくして、わづか一例にすぎないのであるが、他にも二女一男の夫争ひ説話の存在することが明らかに、わが三山歌は今や香具山は歌傍山を男らしい山だと考へて耳成山と争つたといふ折口博士の平明な解釈を主張とすることが出来るやうになつたのであるが、この歌が長歌である以上、他の部分との關係を考へなければならぬし、且つ反歌を伴つてゐるのであるから、それとも矛盾しないかを検討する必要がある。

まづ「嬌を争ふらしき」の「嬌」であるが、果して夫と解することが出来るであらうかといふことが問題になる。一体万葉集において「つま」と訓み得る文字は四種あつて、総索引によると

夫 二、妻 五二、嬌 一四、嬢 一一二
となつてゐる。しかるに「夫」は二例とも文字通り男性の夫であり、「妻」は何れも今日と同じく女性の妻の意に用ゐられてゐる。残る「嬌」「嬢」は両方に用ゐられて居るのであつて、例へば「嬌」が夫の意に用ゐられてゐるものには、天智天皇のなくなつた時、倭姫皇后の作られた長歌に

……若草の嬌の念ふ鳥立つ（巻二、一五巻）

のやうのがあつて、明らかに夫天智天皇の意に用ゐられてゐる。従つて今の場合、「嬌を争ふらしき」を、夫を争ふらしきと解することは少くも文字の上からは差支へがない。ただこの際考へておかなければならないことは、この歌が額田女王を中心とする、大海人皇子と作者中大兄皇子との恋愛事件が下心にあるのではないかと云はれてゐることである。中には關係がないと説く学者も居るのであるが、仮りにないとしても、「うつせみも嬌を争ふらしき」の中には、現世におけるありふれた二男一女の妻争ひが意識せられてゐることは否定出来ない。しかしそれとて、二人の同性の者が一人の異性である「つま」を争つたと異すれば、「うつせみもつま（歌傍山）夫↓結婚の対照としての異性↓妻）を争ふらしき」となつて必ずしも理解出来ないこともない。又、反歌の「相し時」については、万葉時代には適例を缺くのであるが、類聚名義抄に「アフ」といふ訓が施されてゐることからも、これを争つた時と解することに異義がないやうに考へる。その上何よりのことは、「立ちて見に来し」が、一般ありふれた「二男一女」の妻争ひとするならば、何もわざわざ出雲あたりから見に来るにも及ぶまい。これを「二女一男」の夫争ひと考へてこそあられぬ娘御前の争ひとなり、はじめて立ちて見に来るに値する珍らしさが認められて、全体が生きて来るのではなからうか。